

歴史に刻みこんだ著作集

柳澤 明朗（労働旬報社社長）

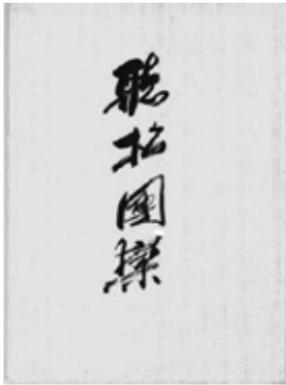
「……民主的実践者には未熟であることは許されません。そんな時代ではないのです——九月二三日、末娘の朱実ちゃんの結婚式で、先生が新郎に贈った言葉である。それまで、若さや香るばかりの可憐さ、華やいだ式に眼を奪われていた私は、その厳しさに全身から汗が吹く思いであった。ご自身、歴史を主体的に生きてきた者であるが故に、そして若い世代への愛が深ければ深いほどに出た言葉であろう。

かつて、ラッセル卿が「自由のためのたたかいはベトナムにあり」と全世界に呼びかけた時に、

先生は「この言葉は、自由のためのたたかいは東京にありと私には聞こえてならない」とベトナム黒書のシリーズに書かれたことを、私はこの時に鮮烈に思いおこした。

それまで、ややもすると、宮沢さんがいったのだが「学会の皆さんはお気毒だ」という思いで著作集をみていたところがなかったわけではなかった。だが、世代も年齢も、経験も才能もこえてそれぞれに未熟であつてはならない時代なのだとしたら、学者でない私には、先生の歴史と斬り結んで生きることをもたもたに受けて生きること、著作集に応える外はないと改めて思つたりした。

歴史の地熱を受け、その底から生ずる問いにこたへつづけて創造された学は、鈍耳鈍眼の私たちに、いつもその足音を示してくれたら手づかみにしてみせてくれた。それは、お前ら幼稚園



『沼田稲次郎著作集』
月報集成

に帰れ！と毎時間毎に叱りとばされた大学院でのゼミ（その烈しさの故にかなりのメンバーが脱落したほどだった）から、とりわけて社が単行本を出す最初となる『運動のなかの労働法』をはじめ、歴史と運動の節々、転換点で、骨太い明解なご指導をいただきつづけてきた。塩田先生が月報に書かれた大

河内先生との座談会を二三回余(のべ一二年〜一四年間つづいた)にわたり、脇で聞かせていただき、切り合いの火花をかぶる緊迫感と同時に、なによりも、先見・洞察が動きの早い現在の歴史に苛酷に試され、やがて真実であったことを実証していくのを見せつけられて驚嘆させられつづけたりました。

思えば、おそらく日本の歴史ではじめて、自由に主張し書ける時代にそれを可能な限りに活用し、戦前からの思索をふくめてその思想の凝縮しきった著作集は、一つの世紀から一つの世紀への贈りものなのだと信じている。その意味で、歴史的・階級的創造を出版させていただく光栄について、発刊の辞でもふれたが、それはもはや一人小社のものではなく思想・科学・文化遺産を世に印し残していく出版人としての社会的事業へ参加できた自負と誇りなのである。

「歴史はその長さにあるのではなく、その深さにあり」といわれる先生の「深さ」と巨大さを刻みこんだ著作集に依り、歴史と運動によりそいながら、社業を展開したいものだと思うばかりである。

(労働旬報社、1976年12月15日発行)

◇現代労働組合研究会のHPへ(TOP)